

研究

佐伯尋常高等小学校の沿革

（その一） 明治年間 山

賛助会員 山内 武 麒

（佐伯市山手区）

○尋常小学校と高等小学校との併合なる

明治三十七年頃から郡内の尋常小学校に高等科を併置されること盛んになつた。

明治四十年に小學校令が改正されて、義務教育の年限が四年から六年に延長され、四十一年には高等小學校の併合を解消しようとする議も起つて、併合の機運が急して来た。そうして遂に四十二年三月二十五日、兩校の併合が成立し、佐伯尋常高等小學校と改称することになつたのである。

併合による児童總数は男女合せて千名を超え、学級数は尋常科十八、高等科五、職員も二十五名と数える大世帯となつた。高等小學校校舍建築の際建てられた職員室一棟は、將來併合の時のことを考へて建造したが、併合が実現された當時は、恰も雜誌の有様で身動きも出来なかつた。校長は高等小學校の校長であつた石川龜治氏が、四十二年四月、佐伯尋常高等小學校長に任せられた。

二十三学級もある大学級数となつたので、学年長制及び部長制を定めて統一を図ることに成り、全校の空気を合併の意気と相俟つて緊張の度を加えた。この頃既に高等小學校の校地に続く南側の空地に校舍を増築にかかつていたが、未だ全部の落成を見ないうち出来た校舍へ次々と三〇九の旧校舍から移転を始めていた。

○文部省より勸奨される

四十二年四月から課外運動としてランニングが始まる。朝起会が起こされる。日曜日と利用してお伊会が行なわれる。児童を中心とした種々な研究が始まる。名々の施設も営まれる。そうして四十三年一月六日に全校舎の新築落成を見たりである。將に教育王国の感があつた。

この時明治四十三年二月十一日紀元節の佳辰に當り、文部省より勸奨の榮に輝く時を迎えたりである。勸奨の文には、

職員克ク協同一致シテ職務ニ努メ教授訓育ノ成績見ルヘキモノアリ仍テ其ノ賞トシテ金百圓ヲ交付ス

明治四十三年二月十一日

文部大臣 小松原英太郎

とある。これは額にして今でも佐伯小學校の職員室に掲げられている。

更に四十四年三月、大分県知事より学業成績佳良なるにまつて金五十圓を付与され、四十五年六月には裁縫手エの成績優良によつて実業之日赤社から賞を受けられた。かくの如く校運の隆昌と見て父兄も喜び、四十四年十二月には父兄有志の寄附金によつて、運動器具器械の設備を見るに至つたのである。

この頃のことと追憶されて書かれた矢田巖太郎先生の手記を抜粋して記そう。矢田先生は三八九の尋常小學校の初代の校長で、併合して首席訓導として勸奨された。

新築された大校舎はおそろしく渠下の他に成見ることの出来なかつた新式のものであつたと思ふ。又て、設

備も之に伴なつて殆んど完備して、職員室の空気は俄然緊張して来た。多年附屬小学校で研鑽を重ね、臼杵小学校で經驗を積まれた石川校長が、銳意計画を立てて指導するのて全職員が活動は実に目覚ましいものであつた。教授に訓練に将又運動に各々その特色を發揮して着しい進歩を見せて来た。兎に角どの方面でも悉く完備をつけるものは母校であつたのである。四十三ヶ年全國に於ける優良小学校として文部大臣の選奨を受くるの光榮に浴したので、名実ともに一段の光を増して来た。そこで參觀者は踵と接して押かけてくる。母校の黄金時代はこの時で、教員諸君にしては此校に職を奉ずることと誇りとしたぐらひであつた。鉄道院總裁後藤新平閣下が鉄道視察として来伯された時、三の礼に於ける歓迎会の席上石川校長と私とが引見されて賞額を受けた事があつたが、その當時を追憶して今なお欣快と覚ゆるのである。敢て功成り名と遂げないのでないが、私としては今が最も退却の好時機と思惟し再三辞意をもちしたのに、然る石川校長の執任に先んぜられ校長代理と余儀なくされた。一時後任難が焦慮したか、四十四年七月新しく町田延吉校長が就任を見たいので十月素願を達して退職を許可され、ここに二十七八年ハ幕を閉じたのであつた。

岩崎温啓先生が記された懐い出の中から、抜すいとると、

私は明治四十三年三月、佐伯尋常小学校と佐伯高等小学校が合併して佐伯尋常高等小学校となりまして、当時訓導として奉職し、大正三年四月に沖鶴尋常高等小学校に転任、大正八年四月に再度佐伯尋常高等小学校に転任し、大正十四年三月、蒲江尋常高等小学校校長に転出

するまで前後十一年間在任しました。その間随分多くの事柄がありましたが、明治四十三年二月十一日の紀元節に全國で数校が文部大臣から表彰された中に、我々も選ばれたことが最も大きな出来事であつた。此の上ない名譽でありました。その時石川寛治先生が校長で、矢田徳太郎先生が首席訓導で、職員は二十一人の組織でありました。それか克く協同一致して職務に勉勵し、教授面にも非常な成績を挙げ、当時県下にも第一位にあつたとの事でありました。

また訓育の面での我々の運動としては、鶴岡、上野、切畑、堅田、木立、八幡と走り、市山城山を中心として毎日身体鍛練に努め、校内の運動には、野球、陸上競技に県下で空前の成績を挙げ、毎土曜日に夜間修養会を開き、職員生徒各自修養に勉め、また毎朝五時より朝起会に出席し冷水摩擦に水風呂にと、上級生を中心にして尋常科五年以上が出席し、職員以下として監督について総べて自主的に実施して永年に及んでいきました。当時の担当者、男子が野村越三、女子が岩崎温啓、土曜会等修養関係今泉作治として夫在任中引続き担当して町田校長時代まで及びました。実に訓育の成績見るべきものありとは至言であるといへば可いでしょう。

また、この当時本校で教鞭をとられ、後に滿洲の関東州へ出向なされた今泉作治先生の懐い出には次のようにある。

懐かしい母校に於ける私ども幼時の思い出は随分多量なものです。緑のあふ城山、その下に荒を並べた校舎、広い運動場、皆忘れられぬ一大印象です。殊に遠

く母国を離れて見ますと云い知れぬ懐しさを感じます。矢田先生、薬師寺先生など子供は何となしに恐い先生であつたが、さて接近して見ると実に優しい可憐深い先生であつた。

三の丸の池、山の栗木権、小使の常さんの声、御天守での擬戦、野球遠征、若き日の思い出はそれからそれへと尽きることがない。運動もした、勉強もした。仕事もした。過去を思い出すと現在が恥かしくてならぬ。

あの朝起会、冷水浴、土曜会、お伽会など、全国優良学校として選擧された当時の片影である。

土曜会（修養会） 毎週土曜日午後七時から、雨が降つても火が降つても、卒業生を中心として修養座談会が開かれた。明治四十三年頃の誕生で、講演者は職員有志と初め、阿南卓氏、金田実氏などであつた。宴会の夜でも中座して七時には必ず出席したのには自分なから感心している。私ハ渡満後日どうなつてゐるがらうか。

朝起会 冬の早朝うす暗い中を提灯を持つて児童が夜庭に集まつて出席調査、男児は有志が井戸端の水風呂に飛び込んで水浴したあの勇ましい光景、野村兄（越三先生）の姿が眼の前におどる。

がゴジと名をついた阿南（卓）兄がお伽会の先頭に立たれた。河野兄（照治先生）が口角泡を飛ばすお伽ぶりは今も忘れられない。同人隊の共同生活は聚落の邊鄙なみた。学校職員でなく児童青年の指導啓蒙に當られた阿南氏の如きは得難い御土教育者であると思ふ。

この当時本校で学んだ元佐伯市教育委員長澤矢健一先生

生の懐い出を記そう。澤矢先生は鶴岡の人であるが、その頃は高等科だけ佐伯校に通つて学んでゐたのである。

私も明治四十三年頃のこの学校の高等科の生徒としてお世話に方りました。校長は石川龜治先生で、朝会の時、物静かに温情あふれる訓話をされました。

後に佐伯町長に方られた高司正直先生が私達の担任で、師範学校を卒業されたばかりで元氣一杯、何時も張り切つていて、国語の時間など達筆で板書され、生徒の背後に廻つてその字をためつすかしつ鑑賞されていきました。

隣の組の担任は山県治夫先生で、商業科の出身らしく、佐藤信淵の歌を口伝えに教えてくれたり、昼食後のひと時によくアラビアンナイトの続き話をしてくれました。

野村越三先生は、風貌も御人格もキリスト様のような感じでした。放課後全員シヤツ一枚でなつて、先生を先頭に何科も走つたものでした。作文の指導も熱心で、一人一人に適切な批評を書いてくれました。批評のついた作文を大切にして何年も持つていまいたが、競争の時いつか失つてしまいました。

筆者（私）にもこの時分の懐い出がある。佐伯小学校開校九十周年記念誌に寄稿した「私の小学校時代」と題する小文を転記する。

明治四十二年四月は私が尋常科三年生に進級した時でありました。私どもは二年生のおとき新校舎へ三の丸が移つて来ましたが、まだその時は新築工事中で、全部が完成したのは四十三年一月でした。

新築された校舎は三棟で、高寺小学校時代の校舎と合せて六棟の校舎がありました。第一校舎といわれ、新しい本館は二階が講堂で、中一本の柱もなく、当時こんな広い立派な講堂は他どこにもなく、県下一と誇っていました。

明治四十三年に、全国優良小学校として時の文部大臣から表彰されました。

辰から表彰されました。朝起会が始まりました。朝ちようどこの頃でした。朝起会が始まりました。朝早く起き——夏は五時頃、冬は六時頃——学校へ集まり、先生から出席簿に印をつけてもらって家へ帰り、朝食をすませてまた登校してました。出席のよい地区には毎月末に星のついた旗——男子には目的地に志の星、女子には赤地に白の星——が授けられていました。またこの朝起会に水風呂入りが始まり、小使室の井戸端近くは水風呂が作られて、元氣な男の子たちが交わるかある飛ぶ込んでいた。冬は朝まで氷を割って飛ぶ込むこともありました。

また、この頃は体育運動が盛んで、一年中通して放課後に運動時間があり、全校一斉にシヤツ一枚に汗の運動場に走り出て、担任の先生の指導の下に思い思いにスポーツをやっていました。一番多かつたのは校外に出て遠くまで駆け足をやったことでした。葛の蔭までとか鶴岡までとか、学年に適當な距離を走っていました。高学年は上野切畑まで走っていました。どしどしぬぶりの雨の中を傘をさして城山へ駆け登ったことを賞えています。その頃の高等科の生徒が、真冬の雪降りの日に運動シヤツ一枚で、中ノ谷峠の麓守藤木まで走って行って、馬に乗って全国を行脚中の福島大将をお迎えし、大将を感激させたいことがありました。福島大将といえは単騎でシベリヤを横断した將軍です。私

どもが児童の頃はこの大将が来校した際に植えた記念の松の木が、本館玄關に何って左側にありました。

こんな元氣発射と一校風は、その当時の石川校長先生を初め、諸先生方のお骨折りでつくられたものと思います。就中忘れられることの出来ないな野村越三先生であります。この先生が朝起会も放課後の体育運動も創められたっております。城山に鳥が鳴かぬ日はあつては、運動姿の野村先生を見ない日はないと言われていました。先生を慕う児童たちがいつも先生の周りに群がり集まって、楽しそうに運動をしていました。この先生も温情におられたお姿が胸像にすぎません。三ノ丸の一隅に立っています。(つづく)

青箱

三の丸の思い出 出 東京 中島 フ 廿

(御紹介)

中島フサ氏は依内先生に生まれ旧姓は兒玉氏、大正の初め中野小学校の教師としてお勤めになられたことにより、編集者にはなつかしい旧師。(毛利家の令嬢のご子孫かと仲のよい学生であった也) 中島子(……)中島時軒と学問をもつて知られた中島家の当主中島祐吉氏と御結婚、東京都世田谷区調布町六五二ノ七に御在住、茶を扱ってゐられるが、旧職もまた多額の御寄附を頂いて左賛助会員です。その際いたいたお手紙、お願ひして掲げることになりました。三の丸の小学校に居るが方々と思ひ出さうものではないでしょうか。号に関連する、依内小学校教育史の挿話として面白いと思ひます。(向榮堂等編集者、外原文のままです) (羽柴)

(前文首略)

いづれは御史談をお送り下さいまして誠に有難く、な